

# 第一部

## 計画の基本方向

第1部では、既往研究・調査に係る文献及び本計画立案に向けて実施した現地調査・市民意識調査等の成果をふまえて、景観に係る政策や諸々の基準・制度を検討し定める際に依って立つ規範を確認しています。

### 第1章

#### 人吉市の風景の成り立ち

### 第2章

#### 市民から見た人吉の風景の価値と今後の課題



## 第 1 章

# 人吉市の風景の成り立ち

人吉球磨地域は「日本で最も豊かな隠れ里」と称され日本遺産（注①）に認定されました。しかし、人吉市が日本の他地域とは異なり例外的に近現代の産業技術変革の波を受けなかったわけではありません。ただし、急流球磨川の中流に開けた盆地という立地から、高速道路や新幹線という九州の交通動脈の変化も、急激かつ面的な土地利用変化を引き起こさず、市街地更新の波が中心市街地にまで強く及ぶことはありませんでした。球磨川本流に市街地中心部で合流する河川・水路網がこのことに影響を与えたことは言うまでもありません。結果として、人吉市の風景は、古代から現代に至る歴史的時間の流れが分断されることなく今なお続いていることを感じさせる稀有な存在と言えるようです。

本章では、このような人吉の風景の特徴と魅力の所在を、ここに流れている多層な時間に着目して描写しています。

1-1	人吉の風景をとらえる視点	14
1-2	地勢から見た風景の特性	16
1-3	社会史から見た風景の特性	19
1-4	歳時記的な風景の特性	21
1-5	日常から見た風景の特性	22
まとめ	人吉にふわさしい風景のあり方とは	23

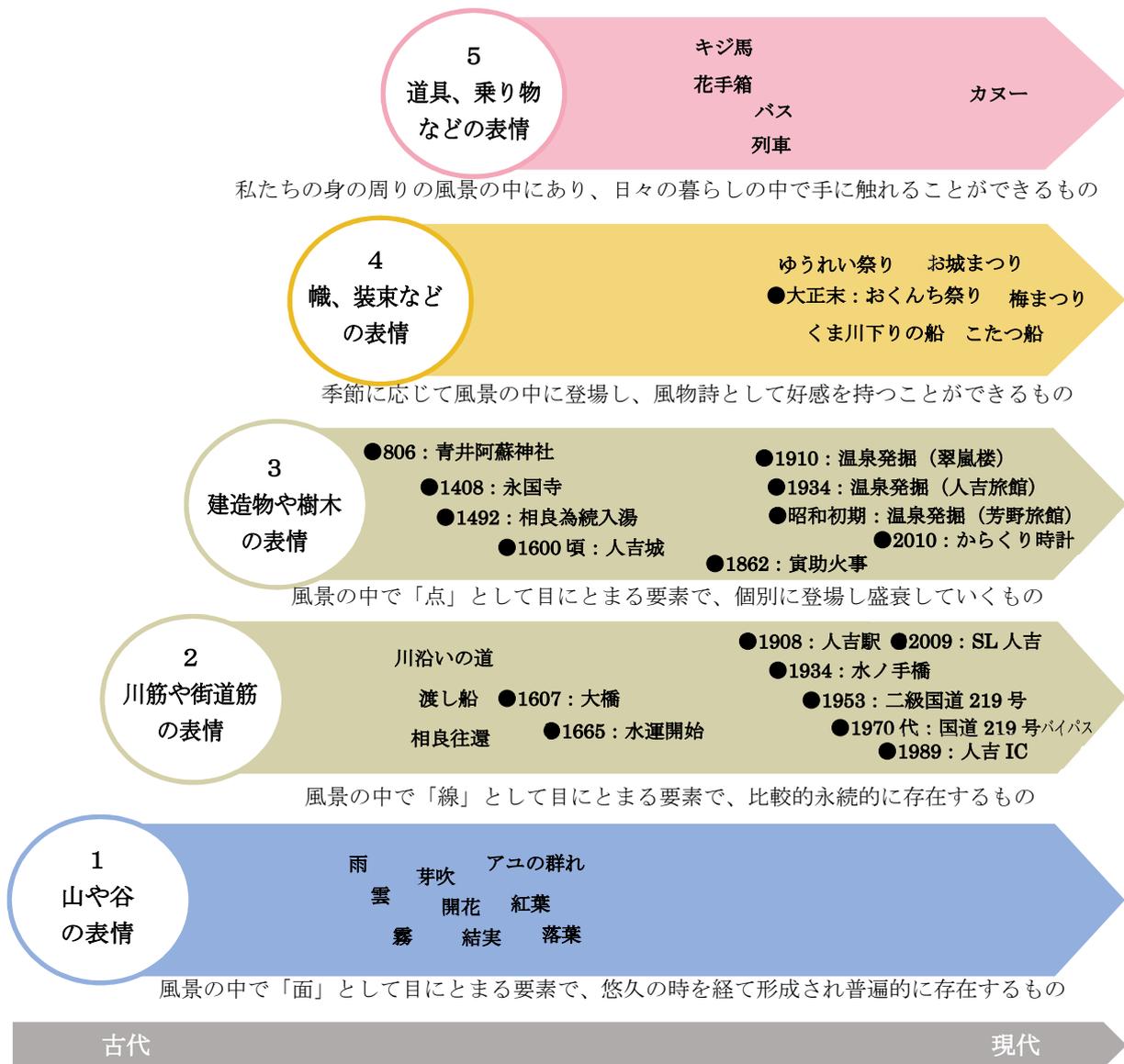
# 1-1 人吉の風景をとらえる視点

## 1. 人吉の風景を形づくる要素

地域の自然や歴史・文化と人々の生活や営みによって形づくられてきた美しい風景は、郷土に対する誇りと愛着を生み出し、地域社会の活力を育てることにつながります。

人吉市の景観計画は、相良 700 年（注②）の歴史・文化と球磨川をはじめとする豊かな自然が織りなす美しい風景の価値を高め、未来へ引き継いでいくために、現状の問題点を解決しながら市民が共有しあえるルールづくりを行うものです。

私たちの眼前に広がる風景は、遠くに見えるものから近くにあるものまで、また、古来存在するものから近年新たに登場するもの、特定の場所に固定されているものから特定の時間や季節に現れるものまで、様々な要素で成り立っています。景観計画ではこれらの要素の一つひとつが、人吉の風景の中に活かされ続けていくための方策を示すこととなります。そこで、多様な要素の中から人吉の風景を特色づけていると評価できる代表的なものを抽出し、大きな時間の流れの上で俯瞰的に捉え（図 1-1）、各要素の計画の中での位置づけを確認するための基礎としています。



私たちの身の周りの風景の中にあり、日々の暮らしの中で手に触れることができるもの

季節に応じて風景の中に登場し、風物詩として好感を持つことができるもの

風景の中で「点」として目にとまる要素で、個別に登場し盛衰していくもの

風景の中で「線」として目にとまる要素で、比較的永続的に存在するもの

風景の中で「面」として目にとまる要素で、悠久の時を経て形成され普遍的に存在するもの

図 1-1 人吉の風景を形づくる様々な要素

## 2. 人吉市に流れている4つの時間から人吉の風景を捉える

以上のように、人吉の風景を構成している諸要素を捉えると、図1-1の1~5の流れは、性格の異なる4つの時間の流れ（地球史的時間、社会史的時間、歳時記的時間、日常的時間）に対応するものと位置付けることができます。

地球史的時間の流れを感じさせる風景

### ●山や谷の表情

国土が形成される悠久の自然の時間の中で、人為によらず形成された風景。川筋と尾根筋で規定される空間を指し、保全・予防の対象とします。

例) 球磨川、支流域、盆地、台地、斜面緑地、原生林



「地勢的景観」要素として計画の対象とします

社会史的時間の流れを感じさせる風景

### ●川筋や街道筋の表情、建造物や樹木の表情

生業や産業がつくる社会の歴史、現代に至るまでの人々の営みの結果生まれた風景。歴史遺跡や都市基盤といった土地に固定されたものを指し、保存や管理・規制等の対象とします。

例) 神社、仏閣、城跡、橋梁、鉄道、水門、鉄塔



「社会史的景観」要素として計画の対象とします

歳時記的時間の流れを感じさせる風景

### ●幟、装束などの表情

動植物や、気象現象、年中行事のように周期的に現れ、日常とは一変する風景。季節、時期の変化を感じさせ、人々の情緒に強く訴える要素を指し、保全・継承・改善の対象とします。

例) 祭り、伝統芸能、朝霧、蛍、桜、アユ漁、こたつ船



「歳時記的景観」要素として計画の対象とします

日常的時間の流れを感じさせる風景

### ●道具、乗り物などの表情

人の暮らしのまわりに存在し、人の営みと共に変化する、比較的小世界の風景。文化の独自性や市民の生活観が反映する要素を指し、保全・改善・活動活性化の対象とします。

例) 町湯、水路、野菜洗い場、水くみ場、プランター



「日常的景観」要素として計画の対象とします

次節では、計画に反映させていきたい以上4つの風景の特性を整理していきます。

1. 盆地の地形がおりなす人吉の風景の特性

人吉市は人吉盆地の西南端に位置し、球磨川が万江川、山田川、鹿目川、胸川、鳩胸川などの支流を合わせ市の中央部を貫流しています。南部には国見山地、北部には九州山地に属する山々が連なります。山や丘陵の尾根線で区画される流域（集水域）は、川沿いの道をたどるとわかるように、それぞれに表情の異なるひとまとまりの風景を作り出しています。人吉市を含む人吉盆地全体の風景は、球磨川本流に注ぎ込む各支流の集水域を基本単位とする風景の集合体とすることができます。

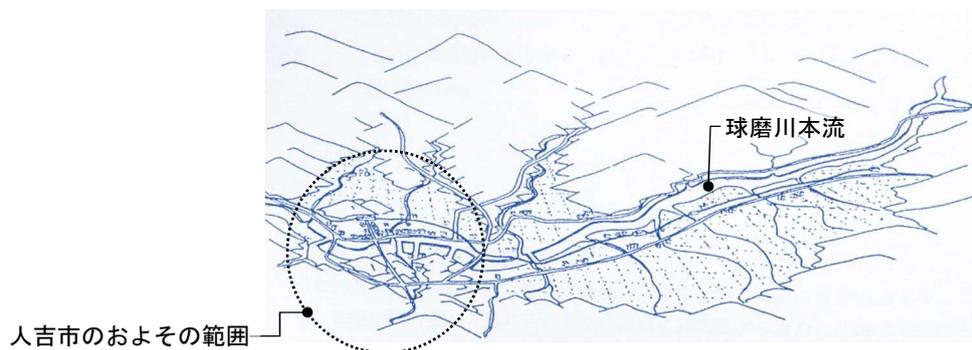


図1-2 人吉盆地の構成 (注③)

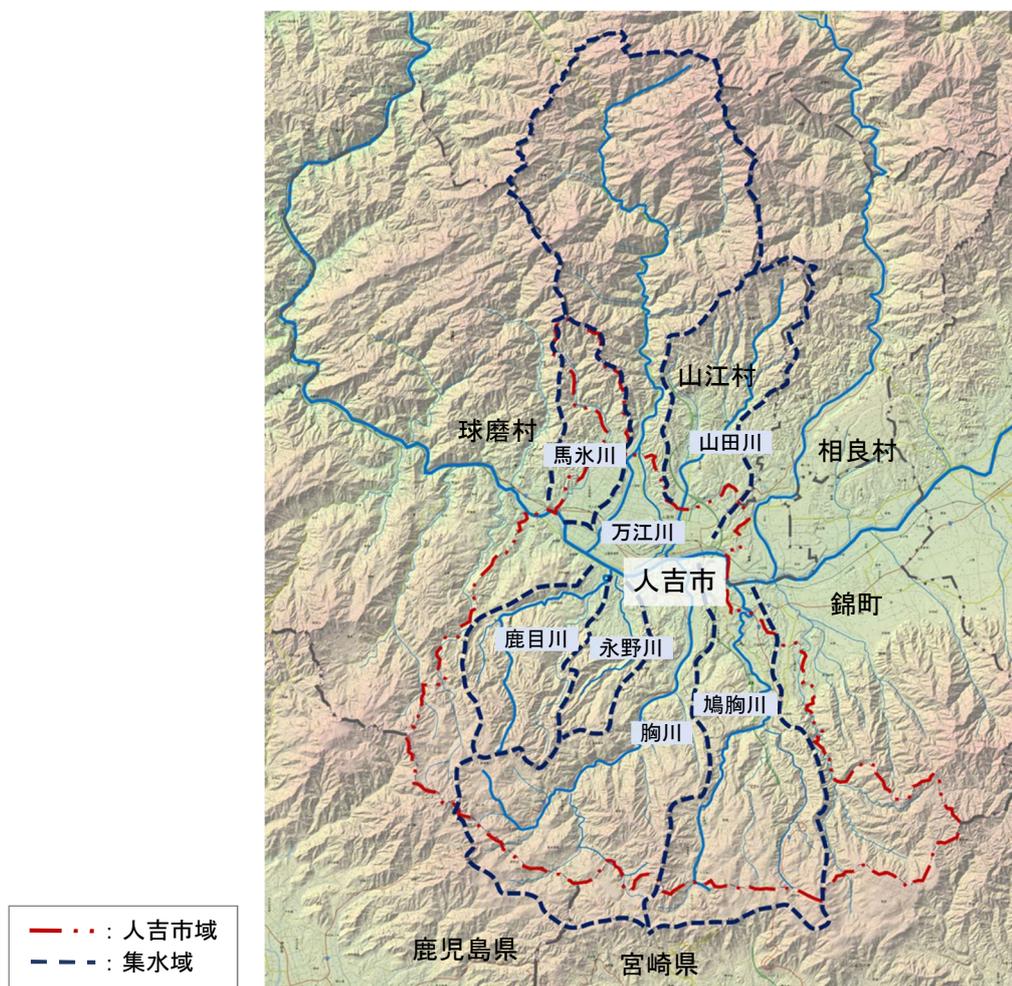


図1-3 人吉市域と集水域

## 2. 各流域に見られる特性

このように盆地の地形がおりなす流域の風景は、視点場を特定して捉える景観の構図の中で「地(じ)」に相当します。そしてこの「地」の表情を作り出す基本的な要素として山々や川べりの植生があります。そこで、以下に各流域の植生特性とその関連要素を抽出し、これらの保全とそれを活かした景観形成方策を検討する基礎とします。

### 《球磨川本流水系の流域》

- 人吉市のシンボリック的存在である人吉城跡周辺に林立するイチイガシ、ムクノキ、エノキ、スギ等の巨木群。  
(写真-1)
- 人吉城跡周辺から下流の天狗橋付近まで続く球磨川左岸の丘陵地斜面を覆うシイ・カシ林やスギ・ヒノキ人工林。
- 織月大橋から西瀬橋にかけての急崖地の広葉樹等の自然林、球磨川中州のムクノキ、エノキなど。
- 青井阿蘇神社の森のクスノキ、シイ・アラカシ。  
(写真-2)
- 人吉駅背後のシイ・カシ林(シラサギの群れを見ることができる)。
- 村山台地のスギ・ヒノキ人工林。(写真-3)



写真-2：青井阿蘇神社の森



写真-1：中川原と人吉城跡の森



写真-3：村山台地の森

### 《万江川の流域》

- 山江村から人吉の西部を流れ、農地が広がり人吉内で有数の穀倉地帯である。井ノ口集落の北側で御溝川に分流し市街地へと流下する。御溝川は旧藩政時代に御屋敷へ引水するための水路であった。(写真-4)



写真-4：井ノ口八幡神社近くの御溝川



写真-5：石水寺背後のコジイ林



写真-6：馬氷川の緑

- 馬氷川(まごおりがわ)に架かる石橋を参道とする石水寺は石門や春先にピンクの花を咲かせる庭の海棠(カイドウ)。石水寺の背後のコジイ林。(写真-5)
- 馬氷川右岸のソメイヨシノ、イヌビワ、ヒサカキ、左岸のイヌビワ、メタケ。(写真-6)

## 《山田川の流域》

- 山江村奥地を水源とし、市北東部の人口密集地を経て市街地の中心部で球磨川と合流する。集中豪雨で氾濫を繰り返してきた経緯があり改修工事が行われている。



写真-7：山田川

## 《鳩胸川水系の流域》

- 中流にある県南有数の規模を誇る人吉梅園。(写真-8)
- JR 肥薩線の大畑駅周辺のスギ・ヒノキ人工林の中に点在するシイ・カシ林。
- 国道 221 号沿線に列植されたヤブツバキ並木 (540 本余り)。(写真-9)
- 最上流域にある国道 221 号のループ橋周辺のもみじバフウ、ヤブツバキ、ツツジ類、サクラ、シイ・カシなどの常緑広葉樹。(写真-10)



写真-8：大畑の人吉梅園



写真-9：ヤブツバキ並木



写真-10：人吉ループ橋公園の緑

## 《胸川水系の流域》

- 中流域右岸のシイ・カシの自然林とその背景のスギ・ヒノキ人工林及び点在するシイ・カシ林。
- 自然護岸に沿う溪相の良い、上流部の桑木津留川にかけて連続する緑。(写真-11)



写真-11：自然護岸の緑

## 《鹿目川水系の流域》

- 下流域の水辺のヨシ群落と沿線の集落と棚田が織りなす田園風景。道行く人にとっての貸景（民地から道路に景色を貸すという意）となっている沿道民地側の季節の草花。
- 中流域から鹿目の滝にかけての河川兩岸の斜面に繁茂するシイ、カシ、サワグルミ、ミズキなどの広葉樹。
- 鹿目八重橋上流の自然護岸沿いのウツギ、エノキ、シデ、イヌビワ、ヤブウツギ、アカメガシワ、シラカシ、アラカシなどで構成される緑。(写真-12)
- 滝の上流部の鹿目集落沿道の民地に見られるサルスベリ、ヒギリ、季節の草花。



写真-12：鹿目川自然護岸の緑  
(鹿目八重橋上流)

## 1-3 社会史から見た風景の特性

現代に至るまでの人々の長い営みの結果、人の手を介して生み出された様々な要素を風景の中に見ることができます。

田畑や道路、市街地等を代表とする社会基盤は、面的で規模が大きく風景の中で大きな存在で、時代を重ねるにつれて当時の社会事情と技術に応じた改変がなされ、維持されてきました。

住宅や神社仏閣などの建造物や工作物の中には、歴史的な価値を持ち地域の象徴的な役割を担うものがあり、それは風景の核となる要素です。

人吉では、日本遺産に代表されるような社会的に意味のある象徴的な景観要素を大切に扱う必要がありますが、それと合わせて、経済成長期に整備され一定の耐用年数を経た面的な社会基盤も更新や補修を繰り返しながら適切な機能や秩序を保つ必要があるでしょう。

このような社会史的な構成要素の多くは、その時代の交通動線上に立ち現れてきたものであり、今後も人吉へのアクセスルートや市内の交通網、市民の生活動線のありよう次第で社会史的景観要素のあり方が大きく左右されます。そこで、人吉の社会史的時代を3つに区分（中世・近世、近代、現代・近未来）し、それぞれの時代の交通事情の違いに着目して、沿線・沿道の特性を捉えておきます。



岩屋熊野座神社



矢岳駅

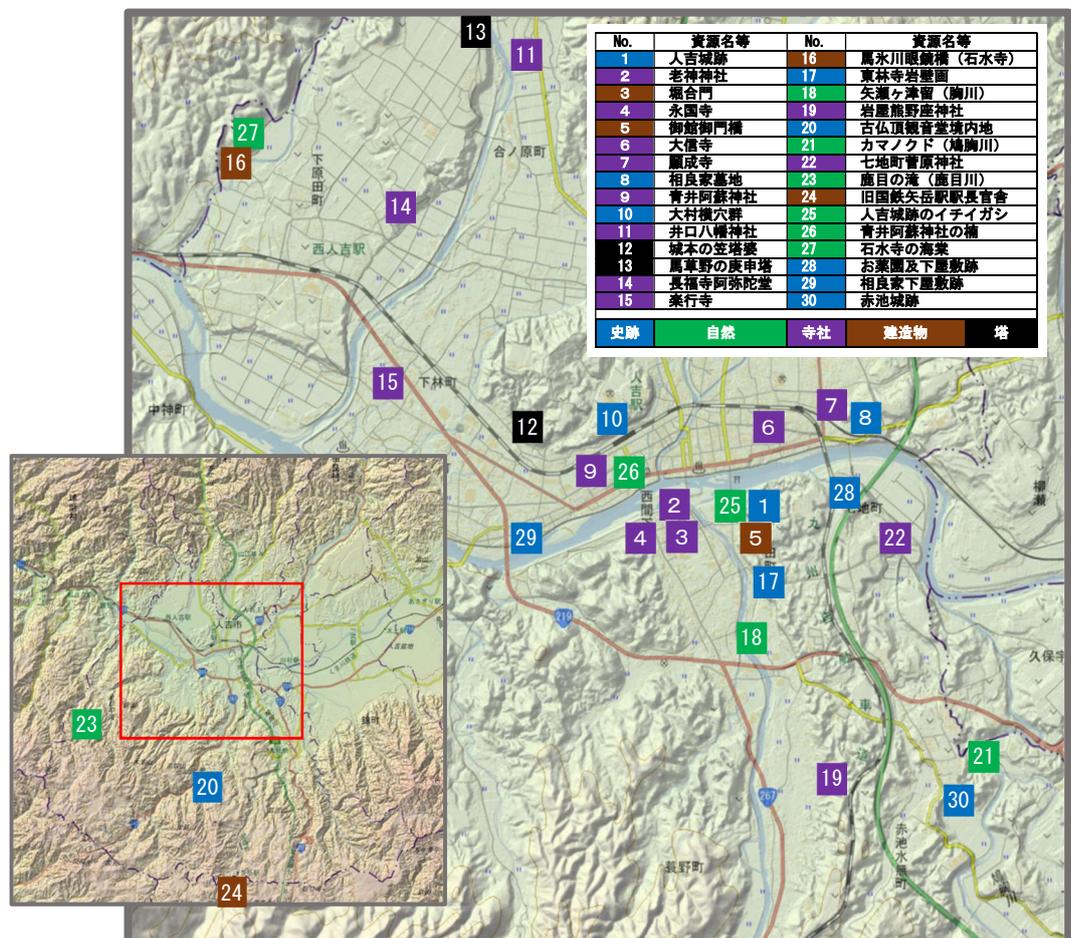


図1-4 人吉の文化財の分布（出典：人吉市教育委員会）

### ○中世・近世の街道沿いに形成された風景 (歩行速度で捉える風景)

市域には中世・近世の街道沿いに形成された集落と日本遺産を構成する歴史的な遺構群が今も息づいています。これらが形づくる街道沿いの風景は相良700年の歴史を感じさせます。(図1-5)

当時薩摩街道から人吉方面へは、相良往還(注④)が主な経路でした。宮崎方面へは国道219号に沿うように湯前方面へ、鹿児島方面へは七地から大畑、加久藤峠を越えて行きました。この経路上の歴史的な資源は日本遺産を醸成し、重要な景観資源と言えますが、当然ながらこれらの資源が姿を現したのは「歩行」を移動の基本とする時代です。このことは、相良700年の歴史的遺産の保全を考える際に見落としてはならない点であり、人吉に今なお残る「街道・街道筋」を、歩行を基本とする動線として改めて位置づけることの重要性を示唆しています。

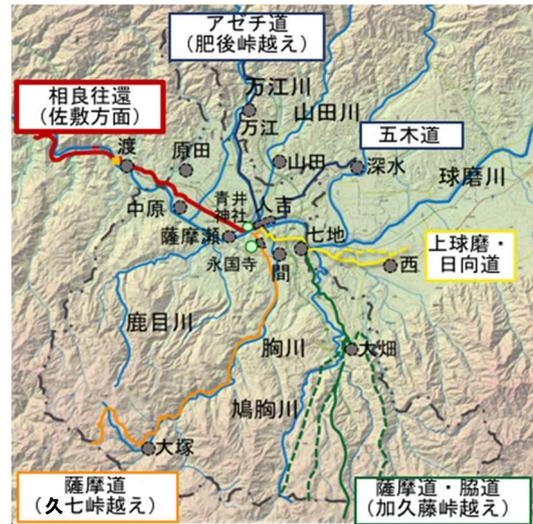


図1-5 中世集落と街道

### ○近代の交通網が生み出した風景 (鉄道を走る列車速度や川を行く舟の速度で捉える風景)

明治から昭和初期にかけて鉄道網と道路網が充実してきました。(図1-6) なかでも肥薩線(注⑤)とくまがわ鉄道(注⑥)は今も広域交通軸としての重要性を失っておらず観光的経済面に果たす役割は依然として大きく、また古くは物資輸送手段であった舟運(注⑦)は観光へと機能を転換させ、球磨川を基軸として成立している本市ならではの風景を形づくっています。このため「列車の車窓の風景」「球磨川下りの舟から見る風景」は市民だけでなく訪れる人たちにとっても記憶に残る大切なものであり、鉄道や航路を基本的な動線の一つとして再度位置づける必要があります。

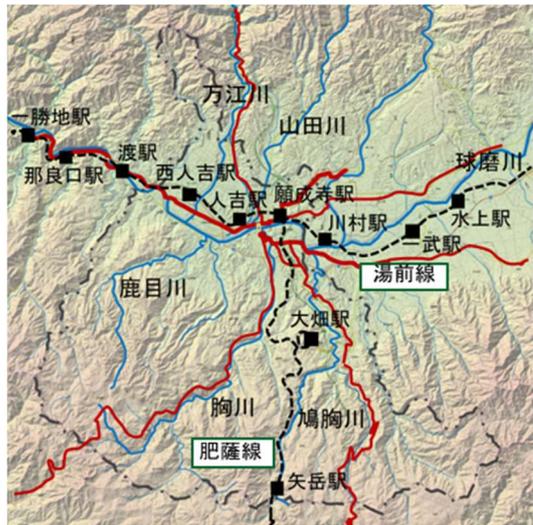


図1-6 近代の交通網

### ○現代及び近未来に向けて生まれる風景 (自動車の安全速度で捉える風景)

昭和40年代頃からの道路網整備の進展は市街地の外縁部への拡大と中心部の空洞化をもたらし市街地の様相を大きく変化させました。中心市街地では空き地や今後の更新が待たれる住宅・施設の増大と、予想されるそれらの中高層化の動きを景観面から適切に誘導していくことが今後の課題といえるでしょう。また、九州自動車道インター(注⑧)や新たなスマートインター周辺の土地利用の在り方や新たに築造される建物などは、観光・ビジネス客等の来訪者の人吉到着時の印象を大きく左右するでしょう。ただし、高齢化社会にあっては、スピードよりも安全(低速度走行)を重視すべきことは論を待たず、交通ルールとも連動させた景観形成方策を検討することが必要です。

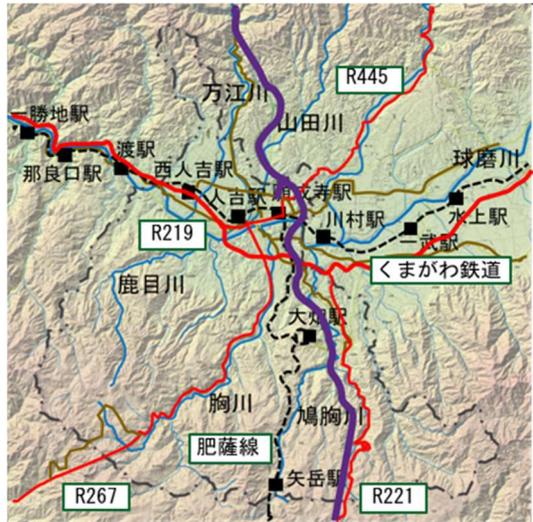


図1-7 現代の交通網

凡例			
<span style="color: red;">—</span>	相良往還(薩摩街道佐敷宿~人吉)		相良往還図に出てくる集落
<span style="color: green;">—</span>	薩摩道(加久藤峠越え、破線:脇道)		青井阿蘇神社・永国寺
<span style="color: orange;">—</span>	薩摩道(久七峠越え)	<span style="color: red;">—</span>	主要な国道・県道
<span style="color: yellow;">—</span>	上球磨・日向道(破線:脇道)	<span style="color: black;">- - -</span>	鉄道
<span style="color: blue;">—</span>	五木道		駅
<span style="color: darkblue;">—</span>	アゼチ道(肥後峠越え)	<span style="color: purple;">—</span>	九州自動車道

# 1-4 歳時記的な風景の特性

人吉の風景は季節に応じて表情を変えます。春夏秋冬の気象現象や動植物の生態、人々の活動が織りなす風景の中で、人々を魅了する代表的なものを歳時記的風景と呼びます。祭りや鮎漁のような四季折々の催事や営みに登場する道具やしつらえなどは、市民の心意気を感じさせる人吉らしい景観資源と言えます。

下の図は、横方向に1年を9つに分け、また縦方向には遠くに見えるものから、近くに見えるものまでを、「遠景」「中景」「近景」「移ろい景」「手元景」と名付けて視界の捉え方を区分して、各時期に各視界でどのような風景が特徴的な表情を表すかを合計45のイラスト風景で描いています。

このように一望してみると、春夏秋冬を通した人吉の歳時記的風景の大まかな全体像がつかめるのではないのでしょうか。

歳時記的風景は、いつどこでどのように風景を眺めるのかという人の行動と関係しているため、市民の人吉に暮らす楽しさをより豊かにするだけでなく、観光客の人吉へ再訪する動機を促す上でも景観計画の中での大切な検討対象です。

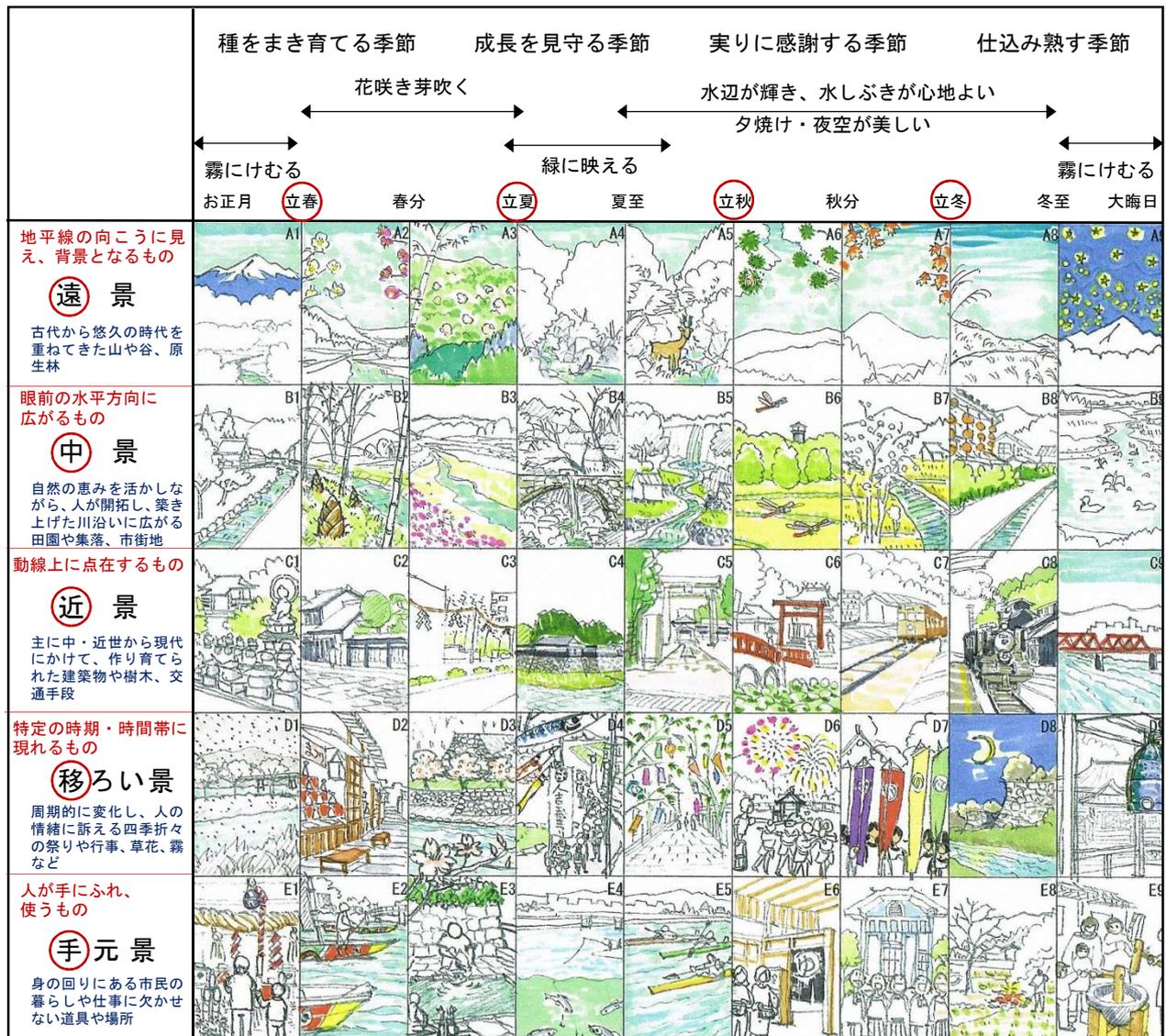


図1-8 四季折々の典型的な風景

○日々の暮らしが織りなす風景

市街地や集落など人々の日々の営みが集積した場所を歩いてみると、その風景の中に人々の個性や習慣を感じ取ることができます。庭の草木や玄関先の花、商店街の看板や案内サイン、農作物や農作業の様子など様々な生活の要素が重なりあって街や集落の雰囲気を作られていきます。

なかでも人吉では水路の音が心地よく聞こえ、川のほとりに共同の洗い場がある集落も見受けられるなど、生活空間と水辺が近いことが特徴として挙げられます。また温泉場が街の一角で営まれ市民が日常的に利用している様子が人吉らしい情景として思い浮かべることができます。このような生活に密着した風景に市民は安らぎを覚え、訪問者はこの土地固有の風景の味わいを強く感じることでしょう。

人吉市街地を流れる水路「御溝」（注⑨）に沿って歩いてみると、水辺空間が身近な存在であると同時に、街の道筋が水辺に沿って球磨川本流につながっていることがわかります。そのため人吉を初めて訪れる人でも自然に球磨川に向かって歩き、川に沿って散歩を続けたい気持ちになります。したがって、家や店などの建築物やそれに付属する看板だけでなく、住まいや仕事場から近い所にある水路、それを介して球磨川へとつながる道や路地まわりにある一つひとつのものや草花などへの気遣いを大切にしていきたいものです。



鹿目集落の案山子



大信寺付近の洗い場



御溝川

○私たちが移動する時に目にとまる風景

自転車や自動車、バスに乗っている時でも、球磨川に架かる橋を渡る時には視界が大きく開け山並みを背景に街並みを一望することになります。

また球磨川では舟やカヌーに乗ることで、歩行時とは違った目の高さから移り変わる風景を楽しむことができます。

観光客はSL等に乗って人吉駅に到着する時、あるいは九州自動車道から人吉インターに近づく時、そこに開けるまちの風景に強く惹かれます。

このように、移動する時に立ち止まる橋や停留所、舟つき場、駐車場などは、見慣れたありふれた風景とも言えますが、そのまちに暮らす人の風景に対する気配りが見て取れる場所でもあり、人吉の風景の質を高める上で留意したい点です。



山田川に架かる鉄橋



人吉駅のプラットフォーム

人吉の風景を捉える視点を「時間の流れ」に置いてその特徴を整理してきました。このように見てくると、「風景を大切にすること」とは、すなわち、「地域の歴史を忘れないこと」であると気づきます。そして、人吉においては、いかなる政治経済的変動があろうとも、「風景に映し出される文化伝統の中心となる軸はぶれない」という確信を根底に据えることとなります。

では、景観計画がめざす「人吉にふさわしい風景」とは市民が具体的にどのように感じるものを指すのでしょうか。風景のどのような点に着目して「ふさわしさ」を検討すべきか、次のような問いを立てて計画内容の検討へと進みます。

地球史的  
時間による  
風景の  
とらえかた

#### 《地勢から見た風景への問い》

広い自然を背景にした、心に浮かぶ「故郷らしいイメージ」や、市民に共通する精神的な拠りどころになる風景はどのようなものか。

社会史的  
時間による  
風景の  
とらえかた

#### 《社会史から見た風景への問い》

地域のシンボルとして認められる風景とその構成要素はどのようなものか。訪問者に紹介したい遺産やその価値を語るにふさわしい見学ルートはどのようなものか。

歳時記的  
時間による  
風景の  
とらえかた

#### 《歳時記的な風景への問い》

祭りなどの年中行事、季節の草花、霧や雪景色などの中で、一年を通じて楽しみに待っているその時期ならではの風景とはどのようなものか。

日常的  
時間による  
風景の  
とらえかた

#### 《日常から見た風景への問い》

地域や住民の個性が生きている風景、身の回りで愛着を感じる風景とはどのようなものか。自分たちの手で守り育て、後世に受け継いでいきたい風景とはどのようなものか。

次の章では上記のような問いをもとに、景観資源調査や市民アンケート、専門家ヒアリングを行い、風景に対して市民がどのような価値や意味を感じているのか、大事にしたいと評価しているのかをまとめています。

- 注① : 地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として文化庁が認定するもの。  
人吉球磨地域は、『相良 700 年が生んだ保守と進取の文化 ～ 日本でもっとも豊かな隠れ里 ― 人吉球磨 ～』をストーリーのタイトルとし、平成 27 年 4 月 24 日に認定された。
- 注② : 相良氏が人吉・球磨地方を治めていた鎌倉時代\*から明治維新までの約 700 年を指す。  
\*建久 4 年 (1193 年) 相良頼景が球磨郡に下向、建久 9 年 (1198 年) その嫡子長頼が人吉城に入城。
- 注③ : 「人吉市景観形成地域調査報告書、平成 5 年、熊本県」
- 注④ : 人吉城下 (相良) から他国 (肥後、日向、薩摩・大隅) への主な陸路は、葦北郡佐敷 (薩摩街道に接続) 方面、上球磨・日向方面、薩摩・大隅方面への 3 路である。そのほか、五家荘方面と八代方面への軍用として用いられたと言われているアゼチ道 (肥後峠越え) がある。  
相良往還は、人吉街道とも呼ばれ、当時は、八代から人吉まで球磨川沿いを通行する道がなく、一旦、八代から薩摩街道で佐敷宿まで下り、そこから佐敷川を遡り、漆川内～告を経て、球磨川河畔に出る。その後は、球磨川沿いに一勝地、渡を経て人吉に至る。渡では、球磨川左岸から右岸 (渡集落) へ渡り船で渡ることが必要だった。  
現在のように八代から球磨川沿いに人吉に至る道路が開通するのは、昭和 20 年代後半以降で、それまでは、佐敷経由となっている。
- 注⑤ : 明治 41 年 (1908 年) 八代・人吉間が開通、同 42 年 (1909 年) 人吉・吉松間が開通。
- 注⑥ : 平成元年に「くま川鉄道株式会社」に移行。
- 注⑦ : 相良氏 22 代頼喬の頃、林正盛が寛文 4 年 (1664 年) 球磨川開削事業を成し遂げ、以来、明治の鉄道開通まで約 240 年間、物資の輸送、郡外への旅行には川船が利用され、五日町・九日町の発着船場を中心に人吉城下は内陸港として栄えた。
- 注⑧ : 人吉インターチェンジが、平成元年 (1989 年) に開通。
- 注⑨ : 別名「殿さん川」とも呼ばれる。